
Bitter Valentine Eve

誘森

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Bitter Valentine Eve

【NZコード】

N6643D

【作者名】

誘森

【あらすじ】

腐れ縁… それだけの相手だと思ってた。

(前書き)

甘さが足りません。
当分の足りない恋愛小説です。
すみません。
それでもよければ是非どうぞー。

小学校のときに、毎年クラスが一緒にやつが届く。
家も近所で、通学路も一緒。母親も仲良し。
腐れ縁に腐れ縁が重なって、受験した中学まで一緒。
普通に市立に進学すればよかつたのに、
あいつの母親ときたら従兄弟の息子に対抗させようと、
自分の息子に中学受験をさせて、わたしと同じ私立に入れてしまつた。

これは全くの偶然なのだけれど、

お互いにどちらが気持ち悪くて、お互いを避けて過いでしていた。
もともと仲がいいわけでもなかつたから、
それは自然なながれだつたのだけれど。

それでも、

そんなやつが急に遠くへ引っ越ししたときは、せつしつて驚いた。

「優くん、イタリアに行くんですってよ蓮美」
母の言い分は、ひづ。

「やつと帰つてくるときはイタリア語ペーリペーリよー。
あんたも何か習わなくちゃーー。」

「やだ」

そしていま、わりと良い高校の一年生。
一学期初日の、下校時間。

無駄に校庭や中庭に手を入れている

本校の山茶花さざんかは綺麗な紅と白の花を咲かせ、
冷たく澄んだ空気は肺に心地よかつた。

穏やかな日差しは、冬であるからか、白っぽくて眩しい。

そんな素敵な日に、

旧校舎の裏側で、付き合い始めて一ヶ月の彼氏と向かい合つわたし。

「やつぱり俺が、合はないと思つんだ」

やつぱり?

今こいつやつぱりとか言った?

自分で呟つて来たのに??

「だからわの…」「めん…」

走り去る、後姿。

それを高速で追う、謎の飛行物体。

それは見事に”元”彼の後頭部を直撃し、やつは前のめりに倒れた。

無様だ。 実に無様だ。

□元に酷薄な笑みを刻んで、

どつかのお偉いさんよろしく堂々と歩み寄るわたし。

後頭部をさすりながら身を起こし、わたしを見て後ずさる元彼。

やべえ！ 感丸出しのこの顔が、なんか。 ダサい。

「おまえが頼むつてから、付き合つてやつたんじやん」

思つたより迫力のある声が出せたので、
わたしの笑みは深くなる。

元彼の怯えよつにも、わたしの笑みは深くなる。

「一発くらこかまさせろや」

ふりあげた手は、思い切り振り下ろされた。

『 まじい？？ ぶつたのお！？ すっげえ！！』

一々語尾を延ばす癖がある友人Aのしゃべりかたは、
こうこう複雑な心境のときに聞くと癪に障る。
しかし、オトナなわたくしはそこをがまんする。

「ぶつた。 ぶちかましてくれてやつた」

『 確かに駅で見たときほっぺ真っ赤だつたあ！！ ハス強すぎい
！！』

後に「ぐぎゅははあん」みたいな奇声が続いたけど、

も「こいや。それはビリだつていいと思つよ。元からだし。

『平手一発で泣き逃げしたんだよ…

わたしあんなダサいのと付き合つてたんだね… 『げろげろ』

『ひど…』

言いながら、声が笑つてる。

それは面白いつからとかじやなくて、単純に嬉しいから。

友人Aは元彼のことが好きだつたのだ。
知つて付き合つてたわたし、鬼でしょうか。

『まあー、

ハスには精神的にたづくましーヤツじやなきやねえ』

おいおいそれはどういう意味だい?

ここのりなしか声に嫌味な響きが入つてゐるけど、氣のせいかな?

「わたしより精神的にたくましいヤツ、いんの?」

元友人Aに、鼻でせせら笑いながら言つわたし。

『いないと困るじやあん…!』

いや、ぜんぜん。

「まあね。キリに掛けるから、切るよ」

『 まああ〜いい 』

ピッ

精々悲嘆にくれる元彼に膝枕でもして慰めてやるがいい、心優しい”元”友人▲よ。

心中で静かに罵りながら、親友の希利香きりかに電話する。

「ホール音が三回なつて、キリが出た。

『 ハス? 』

「 いえす 」

『 なんか用? 』

「 元彼ができた 」

『 おめでとう 』

「 慰めの言葉はどこに行つた! 」

キリのやつは、じつやら笑つたみたいだつた。

『 で、振られたの、振つたの? 』

「 …両方? 」

『 は 』

「おひでてきたくせにわたしのこと振るかひ、むかついてぶつた

『うわあお ヴァイオレント・ガール！』

「うん あいつダサかった」

『白タオルでもふつたか』

「違つて、泣いて逃げた」

『ま、ハツ相手なら妥当な判断だとおも…』

ピッ

ごめんきり、あんたと話してたらすつきりしたよ。
もう十分すつきりしたから、電話を切つたよ。

また明日、学校で会おうじゃないか、”元”親友。

携帯を鞄のなかに入れたら、とたんにバイブレーションが鳴つた。

電車内での電話は絶対に禁止派の人々が、こいつらを睨む。

画面を見ると、きりからだつた。

しかたなく出てやると、

『なあ、ほんとに落ち込んでんの？』

「落ち込むつか、こいつこてるよ

『カラオケ行く?』

「金欠」

『おごったげるよ』

「うん、ありがとう」

『いつもの店ん前で待ってる』

「わかった」

キリが電話を切った。

わたしも切つて、それから電源も切つた。
やつぱりさ、キリは親友のままでいいよ。

喫茶店でケーキとお茶をおごつてもらつた後、
二人で行き着けのカラオケ店へ行つた。
そこで喉が嗄れるまで、音程無視・シャウトまがいの歌声を披露し、
気持ちが落ち着いたところでピチパフェを頼んだ。

ソファーに沈み込むわたしに、キリは微笑みかけた。

「すつ めつした？」

「うん。疲労が気持ちいこつて」の」とかね」

「あんた陸部に入れるよ」

「剣道部とか入らうかな」

「それは遠まわしな殺人予告?..」

「あんたわたしを何だと…」

きりを怒鳴りつけようとしたといいで、ドアがノックされた。
「失礼しまーす」と元気の良い声で言いながら、
バイトなのだらう若い店員が
チチパフェが二つのつたお盆を持って入ってきた。

「あざーっす

満面の笑みでテーブルに置かれるパフェを見つめながら、
細長いスプーンをかまえるキリ。

こいつは甘党だからな。

そんなことを思いながらパフェに手を伸ばしたのだけれど、
視線を感じてその手をとめた。

バイトと思しき若い店員を見上げる。

「何ですか?」

「あ、ああ。知り合いで似てたもんで、つい

「そうですか」

言いながら、わたしもそいつの顔を良く見てみる。
言われてみれば、見覚えがあるような、ないような

特に気にかけるよつたやつじやなかつたんだろひ、と結論付けて、どうしてもその似てる誰かを思い出せないわたしはパフュを引き寄せむ。

半分に切られたイチゴと、よく冷えたポッキーのトッピング。

ホイップクリームとチョコ、

やがやかと顔を立てながらフレークをあくへてこる畠中、題も覚えたある瞬間が挙げられた。

「渡辺
蓮美！」

はい、それはわたしの名前ですよ、バイト君。

完食まであと一回ぱぱとこづきがきよとんと顔を上げる。

「あ、知り合い？」

「おまえ 泉 希利香 だろ」

「すげえ！」

得意げに笑うバイト君に、すこしひこちやうわたし。
誰だよ、お前。

「俺のことわかんねえ？」

二人そろって首を振る。

バイト君が「ショックだなあ」と情けない表情を浮かべると、
きりのやつが唐突に声をあげた。「あああ！…」と。

「あれだ、あれ！」

あれ呼ばわりですか、親友よ。

「ミスター・イタリアン！…」

「誰だよ…」

思わず突っ込んだものの、それからふと、一人。
その内容に該当するやつが居ることを思い出した。

「…中沢 優治？」

「そーそんな名前だった！」

「そ、俺そんな名前

人好きのする笑みを浮かべて、
バイト君こと”中沢さん家の優くん”はわたしの隣に座った。

「三年つて結構長いんだなあ」

「だねー。とくにさ、あんたやハスは顔変わったからー。」

のんきな調子で朗らかに話しかける中沢に、愛想よく相槌を入れるキリ。

おいおい、仕事はどうした。仕事は。

「あ、俺邪魔だつた?」

思つたことが露骨に顔に出たのか、中沢は少し気まずそうに立ち上がる。

「べつに邪魔じゃないよ。ただ”サボってるなあ”つて」

慌てて否定したわたしは、口を滑らせて余計なことを付け足してしまつた。
中沢は、すまなそうに微笑んで、頭の後ろを搔いた。
なんだかありがちな動作。

「じめんじめん。懐かしかつたから、ついな

「じじくさこねえだろ」

苦く笑いながらドアを開け、中沢は仕事に戻つた。
開いたドアの隙間から、

上司なのであるう店員の不機嫌そうな顔が見えた。

予約しておいた曲のイントロが流れ始めたから、二人の会話は良く聞こえなかつたけれど、中沢がすまなそうに頭を下げて、慌てて、しかし丁寧にドアを閉めるのが見えた。

嫌味でなくちゃんと頭を下げる中沢はオトナだと、頭の隅でちらつと思つた。

イントロが終わって、キリが歌いだしても、なんとなく、中沢が出て行つたドアを眺めていた。

「喉がいだいよお」

キリは、本日五度目になる文句を口にした。

わたし達は今、帰りの電車を待つてゐる。

カラオケには六時じるからずっと入り浸つていて、中沢が出て行つた後の二時間ほどの間、ほとんどぶつ続けでキリが歌つていた。

その間飲み物を頼まなかつたのは、

また中沢が来ると少し気まずくなるような気がしたからで。

スーツ姿の中年男や〇〇でじつた返したホームで、

キリは再び「喉がいださい」とつめいた。

哀れを誘う掠れた声に、周囲の人間が数人、キリに目をやった。
けれど、その目はすぐにそらされ、顔には無関心が戻る。

「のど飴をあげよう」なんていうやつは独りも居ない。

まあ、それが普通であり、平和でもあるのだけだ。

「まだ十分くらいあるんだから、
のど飴でも買つてくれればいいじゃない」

売店のある方を顎でしゃくり、
かわいそうな親友にアドバイスしてやる。
キリは少し顔をしかめてから、
「あのおばさん嫌なんだよ」と零した。

キリの言葉に、売店のおばさんに視線を向ける。
ブルドックのよくなたるみ方をしている売店のおばさんは、
青と白の縞模様をした三格勤とエプロンを身に着けていた。

「顔が？」

率直な問いかけに、キリは少しだけ笑つて、首を振る。

「ここの前ね、あそこでガム買おうとしたんだよ。
ミントとスーパーミントで迷つてね、二つ手にもつて考えてたの。
そしたらあのおばさん、すつごに目で睨んでるんだよ。
あんまりあたしのこと見張つてるもんだから、
どつかのおっさんが雑誌くすねていくの、気付かなかつたんだよ」

正直者でお人よしのキリは、万引きなんてしない。

けれどそんなこと、売店のおばさんが知らないでも当然。変なところで「テリケートなキリ」に溜息を付いて、わたしは売店の方へと歩き出した。

キリがわたしを振り返る気配がしたけど、

わたしはキリを振り返らなかつたからやつの表情は見えなかつた。

間近でみる売店のおばさんのブルドッグ加減は、ずじかつた。

思わず田を見開いて凝視してしまつたくらいだ。

飛び切り不細工で中年の、一足歩行の巨大ブルドッグ。

駅弁を買つた〇〇におつりを渡していたブルド…おばさんは、わたしの視線に気付いて顔をこぢらに向ける。たるんだ頬の肉が揺れた。

「なんかようですか」

愛想笑いの一つもない。

少しだけひるんだわたしは、

しかし氣を取り直して「のど飴くださー」と言葉を返す。

普通の会話であるはずなのに、おばさんはそれを鼻で笑つた。

しかし仕事はちゃんとするつもりじゃく、

”金柑のど飴”と書かれた長方形の包みを手に取り、バーコードを通した。

ピッ と、聞きなれた機会音がして、「230円」と無愛想な声が

した。

キー ホルダー がじゅうじゅうと付いた財布を取り出し、
そりそりそこから 100 円札を取り出す。

それを売店のおばさんのが、以外と色々な手に渡す。

手渡されたおつしは、200 円だけだった。

「 100 円足りませんよ」

そうこうと、
おばさんは嫌そうに鼻をならじて（鼻くそが飛び出しだった）、
100 円をわたしの手に置いた。

「 300 円足りませんよ」

は

なんだこのおばん、めっちゃむかつく。
女子高中生の堅きにじてんだろ、この…

それでも、黙つて 300 円を財布から出して、それを渡す。

「 あつがとうござります」

とどめに、元気の作り笑いと、わざとこじこお辞儀をして、
わたしあわの場を去了た。

去り去りとした。

売店から数歩離れたところで、誰かに腕を掴まれたのだ。

何事かと慌てて振り返れば、見覚えのある同年代の男。とりあえず腕を掴むそいつの手をひっぱたいて放させ、わたしより幾分上背のある相手の顔を見上げる。

「何

「そつけな

情けない表情で悲痛な声を上げたのは、我らが腐れ縁大魔王、中沢だつた。

「だつて、何よ」

素直なわたしは、不機嫌を隠さない。

否。先ほどの笑みとお辞儀にマスクを使い果たしてしまったから、もう隠しようがないのだ。

中沢は少し戸惑うような表情を見せたものの、それはほんの一瞬で、すぐに愛想の良い笑みを浮かべて少し後ろにある売店を田で指した。

「なんか、すごかつたなあつて

以外な一言。

がんばつた分、嬉しいかもしねない。

「ありがと

無意識に近いくらい自然に、滑り出した言葉。
誰がその言葉を言ったのか分からなかつたくらい。

「ああ、うそ。どういたしまして」

妙に照れてる中沢に、口ひらまで照れてくる。
何がそんなに照れくわこんだ、この男は。

「ハスー」機嫌だねえ

ぽんつと肩を叩かれて、にやついているキリを振り返る。
視線で「どこが」と問いかけながら、のど飴を手渡す。

「笑つてたよ」

「は

思わず頬に手をやると、キリが笑つた。

「のど飴サンキコッ」

ぽんぽんつと、今度は一度肩を叩かれた。

不思議と、感謝が流れこんでくるように感じた。

「でも以外だつたな。

ハスならあのおばさんぶん殴るかと思つたんだけど…

どこか残念そうなキリ。

何を期待してたんだ、こいつ。

「殴るより効果あつただろ、につけりお辞儀」

話に加わる中沢。

「いやいやいや！ だつてバスだもん！ 殴るべきだよーーー！」

「殴つてこそハスだあああ」と続けるキリの頭に、軽くチヨップする。

「だから、あんたはわたしを何だと？」

「ザ、ヴァイオレント・ガール」

ちつちつと人差し指を振りながら言うキリ】、
本日起こつてしましました、嫌な出来事を思い出してしまったわたし。

「嫌なやつ」

「でもハスのビンタで泣かない男なんていいな…」

「あなたの」とよー。」

「何々？蓮美は誰かにビンタかましたわけ？」

「そーそー！自分からプロポーズしてきたくせに、自分から婚約指輪をはずしたフィアンセに切れてねーえ、」

「違う違うつ 絶つつ 対違つつ 話作るなー」

それから、もう一つ不自然なことに気が付く。

「なんで名前呼び捨てなのよー。」

きょとん。 そんな言葉はぴつたりくるような顔で、中沢は瞬きを繰り返した。それから、やんわりと微笑んだ。やんわりとあざけない、少年の笑み。

「向こうみたいみんなうだだから、癖でさ」

そういえば、ここでは三年ばかり欧米にいたのだったか。

「といふであ泉、俺その話の詳細聞きてえんだけど」

「うそつこ、まつかせなさいーーー あのねえ」

「ちょっと、なんでキリは苗字なのよ」

「え?」

また、きょとん。だ。

そしてそれから、やつぱりやんわりと笑つ。

「なんか、苗字の方が名前っぽいから」

「ああ、よく言われるー」

朗らかに笑うキリに、やんわりと笑う中沢。

そのまま意氣投合といった具合で一人の会話に花が咲き、大きな盛り上がりを見せた。

なんとなく疲れてしまつて、

わたしは一人に背を向けて歩き出す。

会話に夢中な一人は、わたしが見えなくなつても気にしない。

なんだか、「お前は関係ないから」と、そう言われたような気分だ。
そんなのは当然、ただの被害妄想なのだけど。

わたしとキリが待つっていた電車の到着を知らせるベルが鳴り、
それがホームの柱や壁にぶつかつてこだまする。

耳鳴りがした。

ぐわんぐわんと大きな音が鼓膜を突き破つて直接脳に響くような、
大きな音が視界すらも奪つていくように感じた。

やばい、眩暈がする。気持ち悪い。

無意識に額に手を当てる、自分の体温を感じた。
心なしか平熱よりも高い気がする。

電車に乗り込もうと押し寄せてきた人の波に推されて、
わたしの体はゆらゆらと揺れた。

やばい。 倒れちゃう…

ふらり と、一瞬だけ、体がなくなつたような感じがした。

そして次の瞬間には、誰かの腕に支えられていた。

わたしより少し高い身長と、しつかりした腕。

女のものじゃない、そこそこ鍛えてある男の腕。

中沢。

「どうしてだらう、そう思つた。むしろ、そつだと良いなと思つた。」

まだ少しごらぐらする視線を上に上げると、

私の体を支えてくれた腕の主がやんわりと微笑んだ。

「大丈夫ですか？」

それは子供を安心させるような、大人の笑み。

間近で見る精悍な顔に、不本意ながらもドキリとした。
ドキリよりもずっと、困惑の方が大きかつたのだけど。

まじまじと、けどきつとほんやりした視線で見つめてしまったのだ
るつ、
親切な男の人はもう一度「大丈夫ですか？」と繰り返した。

やんわりとした、大人の笑顔に心配そうな色が浮かぶ。
なんだろう。

「心配してくれ」なんて頼んでないのに、申し訳ない気分になる。

「あ…ああ、はい。大丈夫ですよ」

氣力と根性で眩暈を押さえつけて、自分の足で立つ。
氣付かないうちにもたれ掛かっていたのが恥ずかしくて、
顔が勝手に火照りだす。

ああ、赤くなつたりしたら、余計に恥ずかしいってのに。

赤い顔を隠したくて、思わず俯いてしまったわたし。

「これじゃまるで氣弱な女子じゃないか。

「恥ずかしくてお礼も言えません」つてな具合の小学生。

「「」の電車に乗るんですか？」

言われて初めて、当初の目的を思い出す。

慌てて顔を上げると、頭を急に動かしたからか、また眩暈がした。
ふらり、という浮遊感。

けれど今度は、両足を精一杯踏ん張つて平静を装ひ。
大丈夫、ぶつ倒れるのは帰るまで我慢できる。

「はい、乗ります」

歩き出す私。

支えてくれていた腕が離れた。

けれど、支えてくれていた人はそのまま付いてくる。
痴漢かなとも思つたけれど、同じ列にいたんだろうから、
同じ電車に乘るんだろう。

そういうえばお礼も謝罪もしていない。

「あの、すみませんでした」

電車に乗り込んですぐ、「軽く頭を下げる。

「いやいや、なんでもありませんよ

当然のことをしただけだから。

彼は目でそう付け足した。
けれどね、お兄さん。

今の世の中って、当然のことを眞然のように口でやめる人、
もつ隨分少なくなってるんだよ。

「どうもありがとうございました」

そう言って、背を向けて歩き去る。わたし。
けれど、身動きが取れない。

帰宅ラッシュ… 込むのだ、この時間は。ものすうぐ。

かつこよく紺のスーツを着こなすお兄さんと、
向かい合つ形で呆然とする。
なんだかものすごく氣まずい。
氣まずくて氣恥ずかしくて情けない氣分になる。

どうしよう。

しかもなんか笑われている。
わたしじゃない誰かを笑つてるかも…
けど、さつきからこつち見てるんだな、このあんちやんは。
とつあえず軽く頭を下げて、動き出した景色に目をやる。
目が合つたりしたら、気まずさにまいりてしまいそうだ。

しかしある「」とか、この兄さんはわたしに話しかけてくる。

「僕は中沢といふんです。あなたは？」

「…中沢？」

「やつですよ」

それが何か、と。田で問い合わせてくる中沢さん。

だつてほら。

わたしが知ってる中沢って、ミスター・イタリアンだからさ。

「ミスター・イタリアン…」

思わず零しちゃったわけよ。

「ミスター・イタリ… ああ。

ひょっとして優治君の知り合いでですか？」

「優治君… 中沢さん家の優君…？」

中沢さんは、笑いながら肯定した。

「彼はね、僕のイトコなんだよ」

イト「つて、糸子さんとかじやなくて、普通の”従兄弟”か。
だから苗字が一緒なのか。

血が繋がってるから”やんわり”って笑うのか。

ぐるぐる する。

ぽつかーんとしていたのだと思つ。

中沢さんが口元を抑えて、笑うのを堪えていた。

なんとか ぐるぐるぽつかーん から抜け出すると、携帯が鳴つた。
カラオケの中でも聞こえるよう、
着信を大音量のテクノに設定してあつたから
一身に周りの注目を浴びてしまった。

あわてて、電話にいる。

相手の確認なんてしてる暇はない。早く鳴り止ませねば、トクノを。

「なんじことすんのよ！」

相手が誰だかは不明だが、とりあえず小声で非難する。
これでもしキリだったら、メールで罵罵雜言浴びせいやる。

『…』めん?』

知らない人。

電話で聞いたことのない声だった。

誰だよ、あんた。

『もしもーし？ 蓮美ちゃん？』

「こいつ、中沢だ。

携帯の番号、キリが教えたんだ。

「向よ。つてかキリビリよ」

わたしの最新の記憶の中は、キリは中沢と一緒に居た。
やつ途中までわたしと同じ電車に乗るはずだから、
もし今でもキリが中沢と居るなら、キリは困ったことになる。
キリが降りる駅はマイナーなところだから、
この先しばらく続く快速は、一向も止まってくれないので。

『俺と話す』

「は？」

『はあ？ ついで……』

「だつてキリはこの電車のがしたら、一時間半は待つんだよ？」

『いや、俺もその電車乗る人なんですけど……』

「じゃあ今三人とも同じ車内にいるつじ」とへ。

『ナヘ、ナヘこうこうと』

そり、そりこりことなのね。わかつた。
ぐるぐるふらーつとしてたわたしを置いて、
二人そろって、仲良く、おてて繋いで、電車に乗ったのね。
くそお、この裏切り者どもめ！

『つていうか車両何？ キリが心配してゐるぜ』

キリ・・・？

ああ、そうか。もうそんなに仲良くなつたのか。
そうだろうね。おてて繋いで乗車だもんね！

『蓮美？ おーい』

「中沢君」

『は』

「うひのバカをよひしぐ」

『はー』

「じや』

『は…え? ちゅつとまつ…』

。ジバ。

中沢さん家の優君なんて、キリの尻に敷かれてしまえ。

わたしは一度だけ携帯を強く握って、

それから着信音の設定をバイブレーションに戻した。

視線を感じて顔を上げると、中沢ちゃんと目が合った。

「優治から?」

「あ、はー。やうやくナビ…」

「今どこでいるか分かる?」

「IJの電車のどかに乗っています」

「わづ、ありがとウ」

「いえ」

「これで会話は終わり。

そう思つて、再び窓の外に手をやつた。
しかし、中沢さんはそうは思わなかつたらし。

「最近バイトが忙しいのか、帰りが遅くてね。心配してたんだ」

「これは、独り言じやない… よなあ。

わたしは相槌を入れるべきなんだろうなあ。
まったく、社交辞令とか、そういうの。面倒臭い。

中沢関連の人々・物事・なんでも。今は関わりたくないってのに。

「そうなんですか」

「うん。行きたい大学があるんだけど、彼の両親は反対でね。
どうしても行きたいなら、自分で学費を稼げ、って。そう言つんだ
よ」

「だからバイトですか」

「そりゃ。どうしても精神科医になりたいんだ、って

「精神科、ですか」

「うん。大変な仕事だよ」

「外科医とかよりも?」

「患者が違うからね。

怪我や病気を直すんじやなくて、心を直さなくちゃいけない

”心”って、なんだかすごく遠い存在だと感じる。

小学校の道徳の時間に、散々考えさせられた。

色々な道徳的な文章を読んで、感想文を書いて。

お友達とはどう接するべきだとか、立派な人つてのがどうとか。強い心、優しさ、本当のすぐさ。

見ただけで、聞いただけで、笑いたくなる。

そんなもの、先生達だって本当に分かつてゐるわけじゃないでしょ。いらんこと教えないでくださいよ。

それより休み時間増やしてくださいよ。

ふてぶてしくて、斜に構えた子供だったのかもしれない。

「何かきつかけがあつたらしいんだけど、話しくしゃうとするから…なかなか聞けなくてね」

「森田先生が言つ」と聞かない生徒片つ端から怒鳴りつけてゐるの、見たときからですよ」

「森田先生…？」

あ、やっぱい。やっぱいやばい。

これは違うよ、自分の回想のきつかけだよ。

精神科医を目指すきつかけじゃないよ。

「違いますよ、ただの独り言です。気にしないでください」

あわあわと手を振つて、俯く。

これじゃあまるで氣弱でシャイな女の子じゃないか。
誰だこんななの。友達にだってそんなの一人も居やしない。

わたしがつむのむ、こつだつてかじる筋骨のあらやうだ。
なぜかつて、

わたし自身が氣弱くてへろつとした子を見てると、イカつづかる。

もじもじ、ペーぺー。

自分の意見を一々全部口のりもつて、
上田遣こと、氣をつけて、びくびくと周りの様子を伺ひまひなやつ。
そういうのが、わたしは嫌いだ。
やつこつやつと一緒にいると、悪者になつたよつた気がしてくるか
が。

しかし今はさぢうだらう。

下級生の女の子からラブレターをもらつた事さえある、
あの強く気高く逞しい、我らが渡辺蓮美はびこに行つたんだ。
まったく早く戻つて来いつてんだ。

「あの？」

中沢さんが、控えめに手を振つた。

ぼーっとしてる人の顔の前であるみたいな、そんな振り方。

「はー」

「お前は？」

おじょつかやん、自分のお名前、言えるかな？って感じ。
小学生が、わたしは。

「渡辺です」

中沢さんが苗字しか名乗らなかつたのを思い出して、わたくしも苗字だけ名乗る。

いつもの自分を取り戻したくて「せかしい行動をとつたつもりなのが、

あいにく中沢さんはわたしのフルネームを知つていた。

「渡辺： 渡辺蓮美さん？」つて、”もしかして”つて顔で聞く。

否定する理由がない。 しょうがないから頷くわたし。

「優治から、よく話を聞くんだよ」

以外。

だつて、以外。

いつの話だよ、それ。

何話したんだよ、中沢優治。

不安に、不可解に思う反面、なんだか嬉しかつたりする。

それは小学校のとき、友達のお母さんに

「ありがとね、うちの子と仲良くなしてくれて」と言られたときのあの不思議なこつ恥ずかしい嬉しさに似ていた。

「何て？」

こみ上げる好奇心がわたしの口を動かす。

「いつもクラスが一緒で、受験した中学まで一緒だった、とか。

こんだけ縁があるのに、少しも仲良くないのは変だ、とかね。

通学路も一緒にあって突っ込んだり、弱つてたよ」

情けない表情で後ろ頭を搔く中沢が浮かんだ。

やけにくつきりと想像できる。

「気味悪くて避けてしまったから、お互いに

「元気になれる」。

「そう、お互いに避けていたはずだ。
お互いに

「やうなの？」 優治は仲良くしたやうだつたけど

「やうなんですか？」

ぽかん。

きょとん、じゃない。ぽかん。

わたしが驚いたときは、いつも”ぽかん”。

中沢みたいに愛嬌のある”きょとん”にはならない。
女として、悔しさを感じる。

「やうだよ。

その當時は渡辺さんみたいな子が好みだったみたいだし」

楽しそうに笑う中沢さん。

小学生同士の喧嘩の理由を聞いて、

そのバカラしやに苦笑する先生みたい。

ただ、苦笑じゃなくて、楽しそうに笑っているだけ。

小学生多いな、わたし。

中沢さんが先生っぽいからか。

「へえ……

その当時は。

心なしか強調されたように感じた。

それとも耳が勝手に捕らえてるのか。

「あの、」

良くわからないけど、衝動的に何かを言いかけたとき、さつきから持つたままだった携帯が震えた。

ちくしょう。マナーモードにするのを忘れてた。

また、相手を確認せずにいる。

今度こそ、絶対キリだ。わたしには分かる。

「何」

キリが何か言つたみたいなのだけど、

丁度駅に止まつたらしい電車から人が流れ出て、ドアの傍に立っていたわたしは携帯を耳から離し、身をよじつて端に避けなければ鳴らなかつた。

キリはその状況をがやがやといつ雜音から理解したのか、携帯の向こうで静かにしていた。

「で、何？」

人の流れが途絶えたところで、もう一度たずねる。

『今、何号車？ それから番号…』

「な…なか、なかつ」

『俺中沢。中々じやあつません』

「キリは?..」

『だから、』

「なんでキリじゃないの?..」

『なんで?なんで俺そんなに嫌われてるの?..』

「だつて絶対キリだと思ったのに。この裏切り者っ

『俺関係ねーじやん!..』

「問答無用!..」

『え?ちよ、蓮美まさか…』

ピッ

そのままか。

携帯の電源を切ろうとしているといふと、

中沢さんが声をかけてきた。

電車が動き出した。

「また優治か？」

「あ、はい」

手を止めて、顔を上げる。
中沢さんは、思つたより近くに居た。
乗車した人が偉いデブで、
込んだ電車の中を移動できず、ドア付近に留まつてゐるのだ。
夏だったら、絶対に我慢できないだろうな。

「さつき何を言いかけてたの？」

一瞬、何のことかわからなかつた。

「電話がかかつてくる直前

「ああ

ほんと、何を言いかけてたんだろう。
自分でもわからない。

無意識のうちに、首が横に傾ぐ。

何か考へるときつてのは、脳みそが重くなるのかもしれない。

「わかりません」

正直な答え。

だつて、分かりませんから。

でも多分、中沢のことが聞きたかつたんだろう。
多分だけど。

「忘れちやつた？」

首を傾げてから、頷く。

忘れたというより、最初から分からなかつた氣がする。何聞きたかつたんだ、わたし。

考へていたら、また電話が鳴つた。
今度こそ、相手を確認してから出た。
一度も痛い目に会つたわけだから。

確認したときに限つて、キリだ。

「キリ?」

『うんうん――！

冷たくあじりわれた可憐そうなイタリアンと一緒にいるキリだよ』

切つてやううか。

本氣でそう思つた。

仲良くなれて繋いで、乗車したくせに。
しかもわたしをほおつておいて。

「あなたが慰めてやればいいでしょ?」

『だつてイタリアンはハスがいいつつて……痛い！遺体になる……』

寒いシャレ。

けどその前の部分の方が、よっぽど氣になる。
冗談じゃなくて、本当に？

『とにかくさ、あたしは次の駅で降りるから、イタリアンは寂しくなるんだよ。バス、何号車に乗ってるの?』

「ええうそ…」

車内を見回す。

しばらくギミロギミロしてから、6というステップを発見した。

「6号車。あんたは？」

良かつた、近いね。
『4号車だよ』

そこで一度言葉をきつた。

『9号機の、どうりやん?』

「ドアのすぐ前」

『ラジヤー！ これがでや、イタリアン優の携番登録してやつてよ』

「やだ」

「何で

「なんか……いいや、登録しつくよ」

『ついでにメアド交換もしかや おうか』

「もしかしなくても もつ教えてたりする?」

『え。あ、うん』

「本人の承諾なしで?」

『いいじゃいか。腐れ縁が運命の出会いに変わっただけだ』

「何それ!」

電話の向こうで、キリの笑い声が聞こえた。
こいつは本当に、気持ちのいい笑い方をする。
元友人Aとは大違のだ。

『まあせ、仲良くしてやつてよ』

「いいの? あんたがそれを言って」

『え?』

だつておでて繋いで乗車… してないんだ。

「ううん、なんでもない」

あくまでわたしの被害妄想だ。

親友とある意味幼馴染に置いていかれる、被害妄想。

哀しいものじゃないか。妄想力。

『そ』

電車が止まつた。
キリが降りる駅だ。

『じゃあね、ザ、ヴァイオレント・ガール』

「その呼び方やめてよ」

笑い声を残して、電話が切れた。

私は中沢さんとともにぎりぎりまで端に寄つた。
なぜなら、前の駅で乗り込んできたデブが、
出入り口を半分ほどもブロックしているからだ。
しかもこいつ、端による努力すらしない。

周りのやつが避けて当然。って、偉うこと極まりない。
こんなやつ、洗濯乾燥機にかけてギューッと絞つてやればいい。
ベンチみたいな洗濯ばさみで、
部屋干しの影干しされて臭くなつてしまえばいい。

ついでに、森田先生にでも怒鳴られてしまえ。

小さな駅であるためか、人の出入りはすぐに疎らになつた。
二つ目の駅になると、さすがに車内も空いてくる。

すぐ隣で平べつとなつていた中沢さんと目が合つて、苦く笑つた。

中沢さんが何か言おうとして口を開くと、誰かに肩を叩かれた。

親しげに、肩に乗せられた手。

ううとうしご。誰だよ、ずうずうしご。痴漢か？

痴漢も逃げ去る怖い顔を準備して、
肩に乗せられた手を払いのける。

パシッ つといい音がする。

張りのある音つてのは、痴漢を威嚇するのに必要不可欠だ。

精一杯の威厳を持つて、振り返る。

後ろに立っていた若い男が、目を見開いてビビつていた。

「あ、あの…」

「… 何」

「いや、あの、俺。なんか… すみません?」

「… 何で痴漢じやないのよ!」

あらうことか、4号車にいるはずの、中沢さん家の優君だった。

横で、中沢さんが小刻みに震え始めた。

何かと思って振り返ると、彼は口元を手で覆い、
身をかがめて笑いを堪えている。
ちょっとまで。

いいかい、中沢さん。こういつとき、大人つてのはな。

涼しい顔で、何もなかつたように他人のふりをするべきなんだ！

「…、痴漢撃退が趣味なわけ？」

「違うつ 断じて違う… この裏切り者！」

「だから、俺関係ねーだろ！」

「あーー！」 そう言い返すと大きく息を吸い込んだん、
背後で中沢さんの笑い声が弾けた。

電車の中で大爆笑。大人気ないとされる行為。

わたしは思い切り吸い込んだ空氣のやりばに困って、
しばらくそのまま息を止めていた。
しかしそのまま苦しくなってしまって、
むせるような形で空氣の塊を吐き出した。

中沢がわたしの背中を撫でる。

「何笑つてんだ、痴漢」

中沢が、中沢さんに言つた。

中沢さんは”心外だ”と眉間に皺を寄せたのだけど、
それも一瞬のことと、またすぐに笑い出した。
先ほどのように弾けるような笑い方ではないまでも、
随分と笑っていることに変わりはない。
しばらく中沢に睨まれた後、ようやく落ち着いたのか、
今度はちゃんと言葉で”心外だな”と言つた。

「いたいけな女子高生に手え出したんだる、おっさん

「俺まだ大学生。君は来年、大学受験生」

「中沢さんつてサラリーマンじゃなかつたんですか…」

「俺の職業は眼科医だ！」

「大学生じゃねえのかよ」

「眼科になるために勉強してるんだよ、専門大学で」

「すみません、ほんと万年平だと思つて…」

「若いでしょ？万年平っていうよりまだ新入社員つて歳でしょ？」

「やつぱりサラリーマンなんだろ」

「違う！ 知つてる癖にしつこいなあ…」

最後の方、だいぶ声が低くなっていた。

それだけ眼科医になりたいってことなのだろう。

それにして、中沢家の人々つて医者になりたい血筋なのだろうか。

考えてみれば、近所に”中沢耳鼻科”つてあったような：

”中沢不動産”もあつたかもしれない。

いや、あれは高須か。また、高須はクリーチクだ。じゃあなんだ。

中沢さんの後ろでドアが閉まり、
ガタリという揺れとともに電車が走り出した。

なんかもう、不動産屋はどうでも良くなつた。
それより、なんで…

「なんでタカニイが居るんだよ」

そうそう、なんでタカニイがいるんだよ。
…。誰だよ、タカニイって。

やつぱり考えたことが顔に出たのだろう。

中沢さんは大人びた笑みでやんわりと笑うと、
「中沢堯人っていうんだよ、俺」

フルネームを名乗ることで説明をつけてくれた。

なるほど。堀人だからタカニイ…じゃない。堀兄か。

納得。

「あんた4号車じゃなかつたの？」

さつき言いそびれた疑問を、やつと口に出来た。

「いつたん降りて、蓮美のところまできたんだよ。
本当は前の駅でそうしたかつたんだけど、
おまえ教えてくれないから…」

「ふうん…で、キリはもう帰ったの？」

「え、ああ。うん、”バスによろしく”ってさ

「そ」

「うん」

なんてまあ、そつけない会話だろ。

いや待て違う。中沢は愛想良く話してる。

そつけないのはわたしだ。

いつも以上にそつけないんだ、わたし。

だから会話が続かない。

つていうか、頭が真っ白。

なんでだ。くそ、かつこわるい。

「…あのは」

苛々が顔に出ていたのか、中沢が控えめな声で話しかけてくる。

「俺もハスつて呼んでいい?」

聞くかよ、普通。

しかもなんだか照れくさそうに聞くかよ。

いつたん目線をおろして、それから目を覗き込むかよ。
なんて乙女チックな動作だ。お前男じゃなかつたのか。

もしかして将来の夢はニユーハーフとか言わないよな
「好きにすればいいよ」

ああ、それに比べてなんと男らしいんだ。わたしは。

「そ? 良かった」

はにかみ氣味に微笑むな。

” やんわり ” から ” ほんわり ” になってるよ。
そんないじらしい笑い方されたらこっちまで恥ずかしい。
ほらほら。顔が火照ってきたじやないか! どうしてくれー!

「蓮美ちゃん笑うとすごくかわいいね」

「は」

間抜けな声が出た。だつてわたしは笑つてない。
つていうか”蓮美ちゃん”?

「ロリコン」

中沢が低い声を出した。

中沢さんがからつと笑つた。

「家まで送ろうつか?」

優しい、包み込むような笑み。

「風船あげよつか?」って、遊園地のお兄さんみたい。
待てよ。わたしはあのとき幼稚園児だつたじゃないか。
じやあ何か。中沢さんにはわたしが幼稚園児に見えるのか。
それより何て昔のこと覚えてんだ、わたしは。
数学の公式は頭に入らないのに、

どりでもいい事はやたら良く覚えてる。だめな脳細胞たちだ。

「断れ。この人送り狼だから」

「勝手なこと言つなよ、蓮美ちゃんに嫌われるだろ」

「嫌われる。いつそ誰よりも嫌われる」

「あのなあ……」

中沢さんが何か言いかけたとき、
次の駅で電車が止まつた。
わたしが降りる駅は、この次だ。

そこには快速も止まつてくれるのだけど、
キリと居るのが楽しいから、いつもやつと同じ電車にのる。

洗濯乾燥機にかけてやりたい傍迷惑な「テヅ」が降りた。
やつた、万々歳だ。…おやじかわたしは。

「バス、どの駅で降りる？」

「次の駅」

「俺送つてくな

「え」

「こりと、得意げに笑う中沢。

ああ、なんて人懐っこく笑うんだ、こいつは。
頭撫でてやりたくて堪らなくなる。

「蓮美ちゃん気をつけてね、そいつ送り狼だから」

すかさず、中沢さんが言つ。

「堺兄と一緒にすんなよ」

かなり本氣で言い返す中沢に対して、

中沢さんは朗らかに笑うばかりだ。

余裕があるんだな、この人。

よつするに中沢のことからかつて遊んでるんだ。
いいなあ、楽しそうで。

見てるとこりちまで楽しくなるよ。

中沢がこいつをむいて、少しだけはにかんだよつに笑つた。
理由がわからないから首をかしげると、やつは俯いてしまつた。
ことき自分が微笑んでいたことに、わたしは全く気付いていなかつ
た。

「何」

「いや、あのや」

後頭部を搔く、おなじみの姿を披露しながら中沢がいつ。

「俺のことでも前で呼べよ」

「何で？」

「いや、だつてさ」

なんでもわからないんだ、と。表情が語つている。
わからんもんは、わからん。

「俺がおまえのことハスつて呼んでるのに、
ハスが俺のこと中沢つて呼んでたら、変だろ」

同意を求めてくる視線。

わたしさそれを真つ直ぐに見返しながら、深く頷く。

「いや、全然

「今頃いただろー。」

またしても、深く頷くわたし。

「中沢」

「名前で呼べって」

「中沢」

「だからな、」

「それが人にものを頼む態度か」

「あ？」

しばしの沈黙。

わたしは中沢の「何！？」って視線を
真正面で受け止めるのに忙しくて動けなかつたが、
中沢さんが笑つているのが気配で分かつた。

「バス」

「何、中沢」

「おまえさ」

「うん、中沢」

「さつきからにやついてんのはさ、」

「こやつこじんのは何? 中沢」

「…。俺のこじからかってるだろ?」

「やうだううね、中沢」

ドアがフシュー と閉まるのと、

中沢の表情がフシュー と間抜けになるのが重なった。

楽しい。

中沢をからかうのは、すゞく楽しい。

もつとからかいたい。

ずっとからかい続けたい。

何より中沢と居ること事態が楽しい。

わたしは、中沢の空気が気に入ってるんだ。

キリの笑い方が好きなように、中沢の空気も好きだ。

「バス」

「何、中沢」

頬の端が鈍く痛んだ。

無意識のうちに笑っていて、

無意識のうちにそれを抑えようとしているからだ。

筋肉がぴきぴきと引きつる感覚が、今はそれさえもおかしい。

普段のわたしは、こんな些細なことで笑わないから。

「中沢じゃありません、優です

「そうだね、中沢」

「しつこじや。repeat after me、ゆ・う」

「え」

発音が良すぎて、しかもその上早すぎて、
中沢の言葉の一部が聞き取れなかつた。
絶対英語だつた。けど、なんて言つた？

「コリー・アフター・ミー・ゆ・うー」

「ワタシ、二ホンゴ、ワカリマセン」

「二ホンゴじゃないだろ、英語だろ」

しまつた。

テレビで見たアホな外人を真似したら台詞丸写しにしてしまつた。

「ワタシ、エイゴ、ワカリマセン」

「やり直さなくていい、ほら。ゆ・う。言つてみる」

「やだ」

「何で」

「だつて… なんかやだ」

「小学生かよ……」

だつて無理だ。
なんか無理だ。

全身の細胞が無理だとわたしに告げている。
理由はわからない。
けど、言つた後でなにかとてつもないことが起りると、
全身の細胞が痛いほどに叫んでいるのだ。
それはもう、頬が火照つてくるほどだ。

「いつ」

「あ、ごめん。つい」

中沢にほっぺをつねられた。
乙女の柔肌になんてことを！
しかも「つい」ってなんだ、「つい」って。
「蓮美ちゃん、俺もつねつていい？」

「いくない！」

「”よくない”だろ。ってか失せりよーのロココノ」

「だつてかわいいから」

ちょちよつと、人差し指と親指で何かをつまむしぐさをする。
何かつて、わたしの頬の肉なんだけども。

「かわいくない！かわいくないからー。」

そんな個人的観点からなる

身勝手この上ない理由でつねられて堪るか。

「かわいいよ」と微笑む中沢さんを睨む。

「”かわいい”っていうのは、
たとえばゴールデン・レトリーバーの子犬とか、
ちつさくてフワフワの三毛猫の子猫とか、
ステイツチのキー ホルダーとか、
一昔前だけどお茶犬とかのことを言ひのよー。」

「それとか赤いほっぺの蓮美ちゃんとかね

にやにや笑い。

危ないんだ、きっとこの人つて本当に送り狼とかになる人なんだ。
こんな優しそう顔で笑つても実はむつりスケベなんだ。
腹黒いんだ。計算高いんだ。色んな意味で強いんだ。

「わたし、誰にも送つてもらわなくて平氣ですからー。」

ああ、なんかだか無償に恥ずかしい。

からかわれる悔しさと、あまり言われない言葉に対する恥ずかしさ
と。

もうやばいよ。絶妙な取り合わせのやばいこと、やばいこと。
ほら、涙がにじんできたじゃないか。
女泣かせるなんて最低だぞ、送り狼ども。

「そんなこと言つなよ、俺送るつてば」

さつきまで中沢さんに

「口リ「ン」」「変態」等の単語をふんだんに盛り込んだ文章をがなりたてていた中沢が慌ててわたしの腕を掴む。

「責任持つて、安全に、送ります」

「責任持つて、安全に、一人で帰ります」

「そんな拒否なんくても…」

「送り狼でしょ。お放しなさい、この変態ー。」

「女王様かよ…」

氣まずそうに手を放しながら、中沢は後ろ頭を搔いた。多分、腕を掴んでることに気付いてなかつたんだろう。

「大体、俺は送り狼じゃないから」

「”俺は”って限定つけたな、”俺は”って

「そりやあ、”俺は”違うから」

電車が駅のホームに突入した。

わたしは自分が降りるべき駅を、窓から覗き見た。

視界に入るものが近い分、

通り過ぎるのも早くてめがぐるぐるする。

ああ、また眩暈だ…

ちよつとはしゃぎすぎたんだな。

赤くなつたりとかしたから、頭にも血が上つて…
ついでに電車にも酔つたのかな…

足から力が抜けて、重心が分からなくなる。
体の支え方がわからないまま、わたしの体は傾き、崩れる。

「大丈夫か？」

慌てた、心配そうな声がやたら近くで聞こえた。
ああ、また中沢さんか。

本当にお世話になります、すみませんね。

「またか… 熱でもあるのかな？」

またです。すみません、ほんとに。何度も。

ひんやりとした手が額に触れて、
それからじゅくじくと離れた。

「やっぱり、俺送つていくな」

「いい

「いくない

「よくない、だよ

あれ。なんかやたらと中沢の声が近い。
なのに支えてくれているはずの中沢さんの声は遠い。
何事だ。

気持ち悪くて閉じていた目をまくと正面で、

周囲の状況を確認する。

だが、視界を覆い尽くしたのは……これ、たぶん顎だ。

「ほら、降りるぞ?」

また、近くで中沢の声がした。
それから、中沢さんがゆっくりと、
わたしを支えながら電車を降りる。
けどなぜだろ?!

今中沢さんとすれ違った……なんかにやついてる……。

「深呼吸したら落ち着くかもな。

ほら、吸つてー、吐いてー、吸つてー、吐いてー

「…。 中沢?」

「優か、どうしても無理なら優治つて呼べ

「中沢か

「だから…

「中沢さんだと思った…」

「あのなあ、

中沢さんでなく、中沢だと分かったとたん、
どうしようもなく居心地が悪くなつた。

顔が熱い。

動悸が激しくなる。

手足の先も冷たくなる。

したがつてとても気持ち悪い。

「階段上れる？」

「一人で上れる」

気持ち悪さの原因を引き剥がして、
タフなわたしは一人で立ち、一人で歩き出す。
一步一歩が重い。ダルい。面倒くさい。

それでも歩かなければ、家には着かない。
がんばれわたし。歩け、わたし。

「無理すんなよ」

「平気」

「嘘だろ」

「嘘じやない」

「階段から落ちても知らねえぞ」

「…救急車呼んで」

「今?」

「違う。落ちたら呼んで」

手すりにつかまつながら、のんびりと上る。

同じよいうのうのうと電車を降りたこともあって、ホームはやう込んだいなかつた。

6号車、階段の近くでよかつた…

それにもしても、この階段はこんなに長かつたつけ。
部活はしないけど、

プロポーション維持のために毎朝走ってるんだけどな、わたし。
体力には自信があるんだけどな。

ああ、すぐ疲れる… やたら疲れる。 ってか疲れた。

ふいに、体が宙に浮いた。

驚きに声もでない。いや、少しは出た。

「ひつ」って、引きつった声。

「遅い」

「ちょっと…」

お姫様だっこだつたんだ。

だから宙に浮いたんだ、一瞬だけビ。
やだ、怖い。不安定だ。揺れる。
そしてなにより恥ずかしい。

恥ずかしい、恥ずかしい、恥ずかしい（（H）ンドレス

「自分で上れる」

「動くなつて」

中沢の声が少し苦しそうだつたから、
わたしはそれ以上反論するのをやめた。
たまらなく恥ずかしいんだけど…
つていうかあれだろ。

中沢の声が苦しそうなのは、
わたしが重いからだろ？
今頃気付くとは…

「下ろして」

「却下」

「重いんでしょ？」

「全然」

「嘘だ。ぜつつたい嘘だ。下ろせ」

「拒否」

そんなこんなで、結局中沢はわたしを抱えたまま階段を上りきつた。
すれ違う人々の視線が痛かつたのは、言つまでもない。

「最低」

ぜえぜえ 肩で息をする中沢を見下ろして、
わたしは冷たく言い放った。
そんなに重いんだ、わたし。

“無理すんなよ”って、誰の口調よ

「う…、かっこいい、お兄さん」

「バカ」

駅を出て、わたし達はタクシーを拾つた。
わたしの自転車は駅の自転車置き場に止めてあるのだけど、
自転車のは中沢が許してくれないだろ。う。
許してくれたとしても、中沢が漕ぐ自転車で一人乗りだらうな。
だから黙つてた。

「おまえこいつもこの距離歩くの？」

せっかく黙つてたのに、いきなりか。

「こつちは自転車」

「じゃあ自転車置いてあちやつたわけ？」

「うそ」

「うそ」と叫び歩き出るのか？

「うそ」

「迎えに行こうか？」

何でそうなるんだ。

駅まで徒歩 中沢が迎えに来る

おかしいだろ。おかしいだろ、おかしいだろ。

大体、朝から中沢と顔なんて合わしたら、
朝から高血圧だ。そんな不健康なこと願い下げだ。

つてかそもそもなんで高血圧になるんだよ！

「迎えに行くな」

黙っていたら、中沢が勝手に結論をつけた。
待てよ、って、誰かこいつに言つてくれ。

「こつも学校までどんぐりー？」

「1時間ぐりー」

「なら7時に迎えに行けばいいか

「迎えに来なくていいよ」

「来るなって言われても行くよ

「絶つつ対来るな

「…おまえ俺のこと嫌いだろ」

わたしは勢い良く首を振る。

それこそ、頭がふらつとするくらい。

「なりーいじやん」

少し照れくさそうに、しかしからりと笑つてから、中沢は何か言いたそうなわたしに首をかしげる。

「やだ」

「何で

「だつて無理だもん」

「俺暇だから平氣だけど？」

「わたしが、無理」

「だから、何で

なんか、
無理

「やつぱりこの俺のこと嫌いだろ」

「なんで暇なの？」

「あのなあ、

「学校は？」

我ながら急に話しづを変えたものだが、しかし、中沢よ。

あのままだと同じ会話を何回も繰り返すといひだつたんだ。

「通信教育だから」

「イタリア語で？」

「いや、日本語で。学校行かないぶん、バイトできるだろ？」

「そんなに精神科医になりたいの？」

「…。堯兄か」

「あ、『めつ』

「いひつて」

苦く笑つて、中沢は窓の外に目を移した。
沈黙。なんて心地が悪いんだろう。
いやだな。中沢、なんかしゃべつてよ。
わたし今、何も言えないから。

「俺な、イタリア行つたばっかのとき、
英語もろくにしゃべれなかつたわけ。
イタリア語なんて一言もしゃべれなかつたんだよな。
普通、言葉の通じないやつなんかほつとくだろ?
なんつーかさ、一緒に居て歯がゆいから、近づかないだろ」

わたしは頷く。

ああ、我ながら薄情なやつだな。

「けど一人、すっげー氣さくに話しかけてくれるやつがいてさ。

話しかけられても俺何にもわからねえのに、

それでも毎日話しかけてくれるたのな。

授業中とかも、先生よりずっと親身になつて助けてくれるし。

おかげで、俺随分早くイタリア語覚えたんだよ。

それでも普通の会話ができるようになるまで

一年近くかかつたんだけど

その彼が、ある日を境に突然学校に来なくなつたのだといつ。

幾日も無断欠席が続き、不審がつた学校側の職員が電話をかけた。

しかし、誰も電話に出ることはなかつた。

その後も幾度か別の時間に掛けなおしたのだが、

やはり誰も受話器をとることはなかつた。

原因不明の欠席が一週間ほど続いたとき、警察が呼ばれた。

「あいつん家の親父な、昔交通事故で死んだんだよ。
それ以来あいつのおかん、精神的に不安定でさ。
救急車のサイレンとか、急ブレーキの音とか聞くと、
真っ青になつて”助けて”とか”許して”とか叫びだすの。
あいつそんなこと一言も言わなかつたし、
俺に話しかけるやつも少なかつたから、
俺がそのこと知つたの事件の後で…」

彼が始めて学校を無断で欠席した日の前日、

彼の母は交通事故の現場に遭遇した。

見知らぬ男性がトラックに撥ねられるのを目撃したのだ。

そして彼女の目にはその男性が夫や息子に重なつて見え、
半狂乱で帰宅した。

夕方の五時ごろ。

いつもどおり家で宿題をしていた息子を、悲劇が襲つた。

我を忘れた母親は息子の無事な姿を見るなり、

「どうして…あなたが死ねばよかつたのに！」と絶叫し、精神的な混乱の中、台所に駆け込み、

流し台に放置されていた料理包丁を手に取った。

明らかに尋常でない母の後を心配になつてついてきていた息子に、母親は意味不明な奇声をあげながら切りかかった。

約一週間後に発見された彼の遺体は、

現場に駆けつけた警官が嘔吐するほど無残なものだった。

そして彼の母親は、自らの息子を手にかけた後、

息子の命を奪つた凶器で自らの心臓を貫き、自殺したのだ。

「最悪だろ、そういうの」

わたしは、黙つて頷く。

まつたくもつて、ドロドロだ。

こんなむごい事件は、いつだって新聞やニュース、推理小説やホラーの中の世界だった。

でもそれはあくまでわたしにとってであつて、

中沢にとつてはものすごく身近な事件だったのだ。

身近で、大切な人の身に起こつた、本物の事件なのだ。

「ごめん、」

そんなことを思い出させ、話させるべきではなかつた。

とても軽率な行動だつた。

自己嫌悪だ。わたしこそ最低じやないか。

「いいよ、俺が勝手に話したんだし」

大人だ。中沢は大人だ。

苦しいことを抱えて、それを話させたわたしに、ちゃんと気をつかつて微笑みかけてくれる。

そうやって自分を制御して、絶えず周りに気を配るのが世間一般で言う”立派な大人”の姿そのものじやないか。けどさ、中沢。

そんなのはただ

「くだんない」

「え」

驚く中沢と、ぱちり目を合わせる。

それはもうぱちりと合いすぎる。中沢は目をそらせずに入る。

「腹が立つたら怒れ。

悔しかつたら不機嫌になれ。

苦しかつたら苦しいって言つてハつ当たりでもなんでもしきつ

「ただ、優しく笑つて押し隠すことだけ、しないで欲しい。

相手が中沢だから、余計にそう思う。

わたしがいるじゃないか。

同じタクシーの、すぐ隣の席じゃないか。

同じ年の、元ご近所さんじゃないか。

受け止めたいと願つている相手に、

何をそこまで気を使う必要があろうか。やめてくれ。

「ハツ当たりなら、してる」

中沢の顔から驚きが消えて、すーっと真面目になる。
それでいい。本氣でこい。

「精神科の医者になつて、そういう事件とか、
そういう関連の被害者とかを一人でも減らしたいと思つたんだよ。
それは完璧な自己満足だし、
勉強に頭使つてれば少しは楽になれるかもつて逃避だ」

「ガリ勉の現実逃避野郎か。とんでもないな」

「うむせえよ。わかつてやつてんだよ。他じどりひこみもねえから」

「じゃあ、」

タクシーが、わたしの住むマンションの前でとまつた。
運転手さんは気を利かせて、何も言わずに待つてくれている。
ありがたい。

「じゃあ、死ぬまで立派な精神科の医者でござる」

「言われなくとも、」

「応援してやるから、挫折は許さん」

「え」

「わたしが全力で支援してやるから」

驚く中沢の”あよとん”がおもしろくて、かわいくて。自然と口が笑みにほころぶのを止められなかつた。

「必ずかつこじこなにがなれ」

高飛車な命令を残して、わたしはタクシーのドアを開けた。そのまま出て行こうとするわたしの腕を、中沢が掴んだ。

「何」

「俺さ」

中沢が、に一つと笑つた。

「俺チヨウはまぢょつと苦こほづが好き」

「は」

なんで。

すぐ唐突。

「ハスだから、すぐ話せた」

また唐突に話を戻す。

ややいんだよ、あなたは。

「明日7時に向かえにくるから」

そう言って、中沢はタクシーのドアを閉めた。

中沢を乗せて走り去るタクシーを見送りながら、
ぼんやりと思つ。

『死ぬまで立派な精神科の医者でいる

わたしが全力で支援してやるから』

思い返せば、少しプロポーズっぽかったかな、と…

でもそれはないだろ』。

だって中沢とは今日までもともに口利いたこともなかつたし、
このわたしに限つて一畠惚れなんていう軽率なことは…

鞄の中で、携帯が震えた。

取り出しても、メールが一件届いている。
差出人は、不明なのだそう。

とりあえず、開けてみた。

『優だからな

… 中沢か！

急いで登録した。

中沢じゃなくて、優と。

ああそうだ。これからコンビニでチラリ買つておこう。
明日バレンタインなんだ。
しかも優は朝来るんだよ。7時だよ。
ビターチョコだ。急げわたし！

コンビニに向かって走りながら、
頭の隅でぼんやりと考える。

優にyouthを掛けてみようか。
For Youって。

-END-

(後書き)

つたない文章を最後まで読んでくださいて、
あとにありがとうございます。

ああ……やたら鈍感だな、ハス！
でもいいや、中沢君がスマーズだからいや。
中沢、ハスをよろしく。

本当はキリが一番好きです

できれば「意見・「感想等お寄せください」。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6643d/>

Bitter Valentine Eve

2011年1月4日01時11分発行